

氏名	安藤 亮		
授与した学位	博士		
専攻分野の名称	看護学		
学位授与番号	博甲第150号		
学位授与の日付	令和5年3月24日		
学位論文の題目	終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践に関する研究		
学位審査委員会	主査 實金 栄	副査 住吉 和子	副査 名越 恵美 副査 川上 貴代 副査 竹本 与志人

学位論文内容の要旨

本学位論文は、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践における看護師の困難や葛藤の軽減、および看護実践の促進により終末期維持血液透析患者が自分らしく最期まで生ききることに寄与することをねらいに、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の関連要因を明らかにすることを目的とした。

第1章では、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討の研究背景を述べた。終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践には意思決定支援の難しさに加えて、透析看護の特徴に基づく難しさ、課題がある。さらに、その実践には患者および医療者の両側面からの障壁があり、看護師は看護実践に葛藤や困難を抱えている。このような看護師の葛藤や困難は倫理的悩みにつながっている恐れがある。倫理的悩みは看護師の仕事の質やケアの質等に関連しており、看護実践上の重要な課題であり、葛藤や困難の解決が必要である。そこで、本研究では倫理的悩みを減少させることができる医療者の能力である倫理的コンピテンシーに着目し、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の関連要因モデルを立案し、関連要因の明確化を行うこととした。

第2章では、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護師のジレンマ・曖昧さに対する対処を明らかにすることを目的に看護師を対象とした半構造化面接を行い、得られたデータより逐語録を作成し、質的に分析を行った。その結果、ジレンマ・曖昧さに対する対処として【患者の真の思いとの対峙】【患者、家族、医師の共通認識の促進】【医師との信念対立がありながらも、患者らしく最期までよりよく生ききることに向けた医師との協働】【医療職者・介護職者間の対話】【透析見合わせの見極めのための身体状態の注意深い観察】【終末期医療体制への妥協】の6の категорияが明らかとなり、終

末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践についての示唆を得た。

第3章では、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践尺度（Nursing Practice scale for Treatment and Care Policies: 以下 NPTCP）の妥当性・信頼性の検証を目的として、全国の日本透析医学会の認定施設、教育関連施設に勤務する看護師 1000 名を対象に、無記名自記式質問紙及びオンライン調査を実施した。第2章の質的研究の結果および先行研究をもとに、内容的妥当性の確保に努めながら、5 因子 23 項目からなる尺度原案を作成した。その後、項目反応理論に基づく項目特性の検討、探索的および確認的因子分析による構造的妥当性、大出らの看護師の倫理的行動尺度改訂版との相関係数の算出による併存的妥当性、平均分散抽出による収束的及び弁別的妥当性、Cronbach's α 係数および ω 信頼性係数の算出による内的整合性からみた信頼性の検討を行った。その結果、5 因子 19 項目からなる NPTCP について、妥当性および信頼性が確認された。

第4章では、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の関連要因を明らかにすることを目的として、NPTCP を用いて Kulju らの倫理的コンピテンシーの概念分析から導出されたプロセスモデルと、Lazarus らによる心理学的ストレス認知理論を統合した終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の関連要因の因果関係モデルの検証を行った。全国の日本透析医学会の認定施設、教育関連施設に勤務する看護師 2000 名を対象に、無記名自記式質問紙及びオンライン調査を実施した。立案した関連要因の因果関係モデルの適合度は、RMSEA=0.035、CFI=0.938 であり、統計学的許容水準を満たした。NPTCP に対する組織市民行動、倫理に関する知識、部署の組織風土、および NPTCP の困難さに対する NPTCP は有意なパスを示した。これより、組織市民行動がとれているほど、倫理に関する知識を持っているほど、部署の組織風土がサポートイブであるほど医療・ケア方針の検討に関わる看護実践ができていることが明らかとなった。また、倫理的悩みを軽減するための看護実践の困難さへの対処としては、相談等の問題中心の対処だけでなく、情動反応を調節する情動中心の対処の必要性が示唆された。

第5章では、総括として本研究により得られた知見に基づく看護実践への示唆、研究の限界と今後の課題について述べた。今後の課題として、調査対象を広げることでモデルの一般化を目指すこと、明らかとなった関連要因について、研修の実施等の介入により実際に看護実践が促進されるのかを介入研究等により明らかにすることが挙げられる。

これらは本研究における成果であり、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の質の向上や、看護師のジレンマや曖昧さ、困難さの軽減の一助となり、ひいては終末期維持血液透析患者が自分らしく最期まで生きることと寄与すると考える。

主業績（件数制限なし）

No.1	
論文題目	終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践尺度の開発
著者名	安藤亮, 名越恵美, 實金栄
発表誌名	日本看護科学学会誌, 42, 263-270, 2022

副業績（3件以内）

No.1	
論文題目	終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討にかかわる看護師のジレンマ・曖昧さに対する対処
著者名	安藤亮, 名越恵美, 實金栄
発表誌名	臨床倫理, 10, 16-26, 2022

論文審査結果の要旨

本論文は、維持血液透析療法を受ける患者の終末期における医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の関連要因を検討した研究についてまとめたものであり、得られた成果は次のとおりである。

まず研究1として、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践について、インタビューによる質的研究から、その実践内容について明らかにした。結果、実践内容として【患者の真の思いとの対峙】【患者、家族、医師の共通認識の促進】【医師との信念対立がありながらも、患者らしく最期までよりよく生きることに向けた医師との協働】【医療職者・介護職者間の対話】【透析見合わせの見極めのための身体状態の注意深い観察】【終末期医療体制への妥協】があることを明らかにした。

次に研究2として、先の質的研究成果をもとに終末期透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践を定量的に評価できるよう、Nursing Practice Scale for Treatment and Care Policies : NPTCPの原案を作成した。さらに構造方程式モデリングにより「医師との橋渡し」「合意形成の促進」「意思形成支援」「意思表明支援」「症状のマネジメント」の5因子で構成されるNPTCPの妥当性と信頼性を検証した。

最後に研究3として、Kuljuらの倫理的コンピテンシーの概念分析から導出されたプロセスモデルと、Lazarusらによる心理学的ストレス認知理論を援用し、終末期維持血液透析患者の医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の因果関係モデルを仮定し、このモデルのデータへの適合性を検討した。結果、NPTCPには組織市民行動、倫理に関する知識、組織風土が関連していることを明らかにした。

上記の研究1～3の成果から終末期透析患者が最期まで自分らしく生ききるための医療・ケア方針の検討に関わる看護実践の促進や、看護実践に伴う困難・葛藤の軽減に向けた示唆を得ることができた。

また公聴会においては、適切なプレゼンテーションと質疑応答がなされ、申請者は当該分野における十分な専門的知識と研究能力を有しているものと判断された。

以上の結果より、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（看護学）の学位論文として価値あるものと認める。